

(1) 「天において主を賛美せよ。……日よ、月よ、主を賛美せよ。……主の御名を賛美せよ。……火よ、雹よ、雪よ、霧よ、……山々よ、すべての丘よ、実を結ぶ木よ、杉の林よ、野の獣よ、すべての家畜よ、地を這うものよ、翼ある鳥よ、地上の王よ、諸国の民よ、……主の御名を賛美せよ。主の御名はひとり高く」(詩編第一四八詩)。

(2) 「語るものも語らないものも、皆汝を讃える。思惟するものも思惟しないものも、皆汝を崇める。……全てのものは汝に祈りを捧げる」(ディオニシオス・アレオパギテスに帰せられた讃歌)。

(3) 「すべてのものはそれが属する段階に従って祈り、鎖の全体を統率するものへの讃歌を歌う。……蓮の花は太陽の光が差す前には閉じているが、太陽が現れて最初の光が差すと、ゆっくりと開く。そして、太陽が昇りきると満開となり、太陽が西へ行くと、閉じる。ではたして、人間が口や唇を開けたり閉じたりして太陽への讃歌を歌うのと、蓮が花卉を閉じたり開いたりするのは異なったことであろうか。というのも、花卉は蓮にとつて口の代わりとなるものであり、「蓮が太陽の動きに伴い花卉を開閉するのは」自然の讃歌であるので」(プロクロス『神的秘術について』)。

(4) 「七つの天と大地と、そこにあるいっさいのものは、神を讃える。神の光栄を讃えないものはない。ただおまえたちには、それらの賛美がわからないだけである」(『クルアーン』一七・四四)。

(5) 「汝はあらゆるものが——識別できるものも、そうでな

いものも——汝を讃えるようにさせたため、それぞれのものは異なった仕方でも汝を讃美している。……人は生命を持たないものによつて捧げられる讃美の言葉を信じないが、それらの生命を持たないものが、讃美に関する師となった」(ルーミー『精神的マスナヴィー』)。

(6) 「どの花も、うっとりさせるような千の艶姿をもって、哀願とともに神を褒め讃える。鳥たちは心地よい声で、その「王」への連禱を朗誦する」(ユヌス・エムレ)。

その興味深さにもかかわらず、この主題に関する研究は希少であるように思われる。ある特定の伝統に関するものさえ十分に顧みられることはないし、比較研究の観点に立った同様の研究を見つけ出すことは、非常に困難であると言つてよい。

本発表の意図は、諸文献(聖書やキリスト教、新プラトン主義、さらにはスーフィズムにおける宇宙的讃美に関連した文献)の紹介および分析を通じて、宗教学の分野においてこれまで言及される機会の少なかった「宇宙的讃美」という主題がもつ重要性に対して注意を喚起し、もつて同主題に関する将来の研究を促進することにあつた。

### ユングの『世界観』についての一考察

杉岡正敏

ユングはR・オットーのヌミノーズ体験論に大きく影響を受けている。オットーの狙いは単なる宗教的感情の非合理面の強

調ではない。非合理面を認めつつ信仰という持続的理性的な態度を築く点にある。「神秘」という様相でのヌミノーゼの体験においては「聖なるもの」はそれ自身へと人の注意を向けさせるように現われる。「聖なるもの」は「神霊」としてリアリティを持って現われてくる。ここでは「聖なるもの」のリアリティに面する仕方では信仰する主体のリアリティが開示される。ユングも意識的な生、あるいはその中心である自我が異質さとしての無意識との衝突、緊張において開示されている様態の一つの思索の立脚点を置いている。ユングは世界観を、概念的に言い表された態度、と定義する。また態度とは、目的、元型によって方向付けられた独特な心的諸内容の配置だと考えている。ユングによれば、意識的な生は外界および内界に面している。自我は生を導きつつ、存在を巡って戦っている。世界観は、何のために行動し、生きるのか、を明らかにしようとしたときに語られる、とユングは考える。そのような自我には目的表象が必要である。世界観が形成され、より心の安定が得られるためには、現状を相対化して世界観が獲得されなければならない。またその世界観はつねに再形成されていかねばならない。自我は創造的なイニシアティブを要求される。ユングによれば世界観と自己認識は往還的に形成されていく。そもそも我々は世界も我々自身も一体何ものなのか、絶対的な知識などもたない。「あたかも」といった保留つきで知るにすぎない。そのような認識はまた先に見たユングの基本的な認識にもつながっている。世界観の客観的妥当性に確かに怪しい。我々は少なからず客観的な全体を狙う。異質さをひきまう世界観を形成していく

なかで創造性は発揮されなければならない。また「あたかも」というあり方でしか世界も我々自身のあり方も現われてこない中で唯一確かなことは、そのように両者が対峙して開示されていくことをもたらす「自律的なコンプレクス」の働きである。自律的コンプレクスとはまた「大いなるX」とも呼ばれているが、ユングにおける「魂」を指していると見てよいだろう。世界観と自己認識の往還的な形成に元型の働きが関わるとユングは考えるが、元型とはもっぱら表象が生み出される可能性であって、世界観の形成においてはその作用が、現状や従来の世界観を捉え直す可能性として、上位の表象という仕方で行われる。元型は魂の働きや、あるいは意識、無意識の緊張関係において現われている生のあり方を示唆している。世界観についてユングがフロイトを批判する場合も、この自律的コンプレクス、あるいは魂という、ただ体験されるのみで全く記述の対象とはなりえないものが、フロイトの世界観からは見出せないだろう、という点がポイントなのだ。ユングはまたいわゆるシンクロニシティに関しても、その事態が何を指すのか、という問いに対して、回答を保留する。心と世界の関係に明確な規定などできない。むしろユングの関心は常に心で体験されていることとの意義を確かめることにあるだろう。それは一見すると対象を無規定のまま放置しているようにも見えるが、それを無理やりに知的理解の下に引き据えて記述してしまう方が逆に問題なのである。